

役割自己評価と主観的幸福感の関連

—— 評価基準による違いの検討 ——

越 良 子*・秋 光 恵 子**・吉 村 典 子***・森 永 康 子****

(平成14年 4 月30日受付；平成14年 6 月19日受理)

要 旨

本研究の目的は、日本人成人女性において、役割達成に関する自己評価と主観的幸福感(SWB)との関連が、評価基準によってどのように異なるかを検討することである。子どもをもつ既婚女性に対して、妻、母、就労者としての役割達成度に関して、類似他者、過去の自己、理想自己の3つの基準による自己評価が求められた。結果から、就労の有無に関わらず、各役割に関して他者を基準とした自己評価と理想自己を基準とした自己評価が高い人は、SWB も高いことが示された。過去の自己を基準とした自己評価は、常勤で就労する人たちにおいては SWB と無関連であった。これらから、40歳代成人女性において社会的比較が重要であること、すなわち彼女達が他者との比較によって自己を査定していることが示された。また、理想自己に近づくことを目標としてもち、その達成を高く評価することが、成人女性の SWB に有効であることも示唆された。

KEY WORDS

主観的幸福感 subjective well-being
社会的役割 social roles
自己評価 self-evaluation
評価基準 standards of evaluation
成人女性 adult women

問 題

従来、主観的幸福感 (subjective well-being: 以下, SWB) 研究においては、成人女性の場合、妻としての役割や母としての役割、仕事をもつ就労者としての役割といった、社会的役割が重要な影響をもつとされてきた。そこでは特に、役割の多重性と SWB との関連、あるいは役割の質と SWB との関連という観点から検討が加えられてきている。

例えば Sieber (1974) や Thoits (1983) は、複数の役割従事は様々な経験や賞賛を得ることを可能にし SWB を高めるとした。複数の役割に従事することによって、ひとつの役割従事で生じるストレスを他の役割従事でトレードオフすることが可能になり、SWB が高まるという報

* 心理臨床分野

** 甲南女子大学大学院文学研究科 (現所属 兵庫教育大学)

*** 甲南女子大学大学院文学研究科

**** 神戸女学院大学人間科学部

告もある (Barnett, 1994; Barnett & Marshall, 1992; 兵頭・大利, 2000; Stephens, Franks, & Townsend, 1994; Martire, Stephens, & Atienza, 1997). Barnett & Baruch (1985), Baruch & Barnett (1986) は, 妻, 母, 就労者役割について, 役割従事によって得られる報酬や負担に関する評価すなわち役割についての評価が SWB に及ぼす影響を検討し, これらの役割に従事しているかどうかよりも, 役割そのものの質を高く評価するか否かが SWB を規定することを明らかにしている。なおこれらの研究では, SWB は, 満足感, 充実感, 自尊感情 (self-esteem) 尺度などによって捉えられており (Baruch & Barnett, 1986; 兵頭・大利, 2000; Vandewater, Ostrove & Stewart, 1977), さらに幸福感は充実感・生きがい, 能力・自己肯定などの側面から構成される (植田・吉森・有倉, 1992; 嶋, 1997)。

このようにこれらの研究で検討されたのは, 成人女性の役割従事の有無, あるいは, 従事する役割の内容やそれに伴って経験される出来事と SWB との関連であったといえる。すなわち, 単数であれ複数であれ, 役割に従事することや役割そのものが成人女性の SWB に及ぼす影響が検討されてきたのである。ここには, 従事した役割における各自の達成度がどの程度であったかという視点は無い。しかし, 成人女性の SWB を役割との関連から考える際, 社会から付与された役割の数や内容だけでなく, 役割遂行に際しての役割遂行者としてのあり方, すなわち役割遂行者としての達成が SWB に及ぼす影響を考慮する必要があるのではないかと。つまり, 役割に従事することや従事する役割についての評価ではなく, それを自身がどの程度全うできているかという役割達成度の自己評価が SWB に及ぼす影響を考慮する必要がある。

こうした点について, 土肥・広沢・田中 (1990) は, 役割達成感と生活満足感の関連を検討している。そこでの役割達成感とは, “役割従事することによって, 夫や子どもや職場の友人などとの充実した人間関係や自己の成長にとって, 報酬があると感じるか, あるいは損失があると感じるか, といった心理的状态を測定するもの” (p.139) とされている。つまり, 役割に対して, あるいは役割に従事することに対して満足を感じている程度として測定されているといえる。しかしながら, それらはあくまで役割に従事することに付随した, 役割内容に依存する達成感である。役割遂行者としての能力も反映されるものではあるけれども, 個人がいかに妻, 母, 就労者として役割を全うできているかという自己評価を直接捉えているものとはいえないであろう。そこで本研究は, 役割を十分に遂行できているかどうかという役割達成度の自己評価を取り上げ, それと SWB が如何に関連するかを検討する。なおここでは, 成人女性の主要な役割として, 妻, 母, 就労者役割を取り上げる。

ところで, Mettee & Smith (1977) によると, 自己評価の源泉には, 社会的比較, 社会的フィードバック, 自己観察, 非社会的環境からのフィードバックがある。つまり, 自身を他者と比較して, あるいは, 自身の行為やその結果について, 他者の視点も取り入れて自分自身を振り返ることによって, 自己が認識され評価される。その際, 自己評価の基準として, 一般に, 社会的比較の対象である他者, なかでも類似他者が多く選ばれる (Festinger, 1954)。一方, 他者を基準とするのではなく, 過去の自分自身 (Albert, 1977) や, 理想的な自分自身 (Higgins, 1987; Rosenberg, 1965), すなわち時系列基準も用いられ得ることも明らかにされている。これらの基準は, 同時に使われ, あるいは状況によって多様に使い分けられて (Suls & Mullen, 1982), 現在の自分自身についての自己評価は形成される。

こうした各基準による自己評価は, その機能が異なる。他者を基準とした自己評価は, 他者よりも優れているか劣っているかという自己評価であり, 優越感あるいは劣等感をもたらすも

のである。これに対して過去の自己を基準とする自己評価は、自己のパフォーマンスの向上または退化を査定する手段 (Suls & Mullen, 1982) で、自己の時間軸上での変化度についての情報をもたらす成長感の有無をもたらす。理想自己を基準とする自己評価は従来適応や自尊感情の指標とされてきているが (Carlson, 1965など)、理想的な自己像が目標として機能しうる目標志向的自己評価形態であるとも考えられ、時間軸上に目標としての理想自己と現在の自己を置いた、目標志向に基づいたズレの認識をもたらすといえる。したがって、役割達成に関する自己評価と SWB との関連を考えた場合、このように異なる機能をもつこれらの基準による自己評価は、SWB とそれぞれ異なった関連をもつものと推測される。

各基準による自己評価と SWB との関連について、Stassen & Staats (1988) は、青年の場合、健康、家族関係、住宅、仕事などの11領域において、他者を基準とした自己評価も理想状態を基準とした自己評価も、SWB と関連することを示した。また、中年女性において、キャリアに関する若い頃の目標水準と現在との違いが大きいと精神的健康度が低いことが明らかにされている (Carr, 1997)。さらに堀毛 (1995, 1996) は、20歳代から60歳代の成人男女において主観的充実感とパーソナル・テーマすなわち自分の人生の目標との関連を検討し、パーソナル・テーマの進展状況や実現に向けたスキルの高さが充実感を規定することを見いだした。このように、様々な基準による自己評価が取り上げられ、SWB との関連がいくつかの研究において明らかにされているが、自己の役割達成に関する各基準による自己評価と SWB の関連は明らかではない。

以上のことから本研究では、成人女性の役割達成度に関する自己評価と SWB との関連を明らかにすることを目的とし、評価基準によるこれらの関連の違いを検討する。すなわち、成人女性において、妻、母、就労者としての役割達成度に関して、他者、過去の自己、目標としての理想自己を基準とした自己評価と SWB との関連を明らかにする。なお、こうした役割達成についての自己評価と SWB との関連は、就労の有無によって、あるいは常勤・非常勤などの勤務形態によって異なると考えられるので、上記の検討を就労形態ごとにおこなう。例えば常勤で就労し、かつ妻・母役割も担っている人と、無職で妻・母役割のみの人とは、役割の数という点で異なる。役割の数が SWB に影響を及ぼすことは、先述の Sieber (1974)、Barnett (1994) などによって明らかであり、自己評価と SWB の関連を検討する場合にも、考慮する必要があると考えられるからである。

方 法

手続き

1999年9月に郵送法による質問紙調査をおこなった。

被調査者

西日本の3つの女子短期大学を1974年から1978年までに卒業した、40歳代前半の女性2022人に質問紙を送付した。このうち389通は住所不明で返送され、596人から回答を得た。回収率は36.5%であった。このうち2人は回答の著しい不備のため分析から除外し、594人を分析対象者とした。分析対象者の平均年齢、職業等は結果において述べる。なお、調査対象を40歳代前半としたのは、これが一般に結婚、出産などのために離職した女性が再就労する時期にあたり、妻、母、就労者の3つの役割に従事する人が多いと推測されたこと、子どもの年齢が10歳代に

なり育児から手が放れる時期にある人が多いと推測されたことによる。

質問紙

質問紙には、デモグラフィック特性に関する項目と、役割自己評価項目、SWB 測定項目が記載されていた。

質問項目

①デモグラフィック特性項目 年齢、配偶者の有無、結婚年数、子どもの有無、子どもがいる場合は人数と年齢、自身も含めた同居家族数、仕事の有無と就労形態（常勤・正社員で働いている、パートタイム・アルバイトで働いている、在宅で仕事をしている、自営業（農林漁業も含む）である、働いていない、その他、の選択肢から回答）、就労している場合は現在の仕事の継続就業年数、学歴、家庭の年収（0～300万円、301～600万円、601～900万円、901～1200万円、1201万円以上、から選択）を尋ねた。

②役割自己評価項目 妻、母、就労者としての役割達成度に関して、類似他者、過去の自己、目標としての理想自己を基準とした自己評価（以下、それぞれを他者基準自己評価、過去基準自己評価、理想基準自己評価と表記する）を、それぞれ2項目（妻役割は3項目）ずつ、計21項目によって回答させた。具体的には、妻役割においては、妻としてよくやっている方だと思う、夫とのコミュニケーションはうまくいっている方だと思う、主婦としてよくやっている方だと思うの3項目、母役割においては、母親としてよくやっている方だと思う、子どもとのコミュニケーションはうまくいっている方だと思うの2項目、就労者役割においては、自分の仕事をよくこなしている方だと思う、自分の仕事ぶりについてよくやっている方だと思うの2項目について、それぞれ同世代の妻・母・働く女性、過去の自分、こうでありたいと思う姿と比べて、そう思う程度を5段階で（“同世代の妻たちと比べて、私は、妻としてよくやっている方だと思う”という設問に対して、5：はい、4：どちらかと言えば、はい、3：どちらとも言えない、2：どちらかと言えば、いいえ、1：いいえ）評定させた。

なお過去の自己については、過去として想定できる時期はあまりにも広範で、比べるべき時期を特定しなければ事実上回答不能である。また、本研究では過去との比較による自己評価すなわち成長していると思えるかどうかとSWBとの関連をみたいのであり、成長感を測定するためには役割によって比較基準が異なるのはやむを得ないと思われる。すなわち、妻、母役割は家族の成長発達とともにその役割内容が変わるので、中学生の子どもをもつ女性が母として成長したかどうかを、例えば子どもが赤ん坊だったころと比べてみても、現在の自己評価測定をしたことにはならないであろう。夫との関係や子供の年齢などが現在と類似した状況にあったと思われる少し以前との比較が意味があると思われる。一方就労者としては、職業人として成長したという実感は、ある程度の過去との比較が必要であると思われる。むしろ自分自身が成長しているかどうかを考えるのには、今の仕事を始めた頃との比較がクリティカルであろう。そこで、妻役割、母役割に関しては少し以前の自分を、就労者役割に関しては今の仕事を始めた頃を想定させた。

③SWB 測定項目 複数の指標によりSWBを測定するため、充実感尺度及び幸福感尺度を使用した。大野（1984）を参考に作成した“毎日の生活にはりがある”“毎日の生活に退屈している”など14の充実感測定項目に対してあてはまる程度を5段階で（5：当てはまる、1：当てはまらない）、また、堀毛（1995）を参考に作成した“幸福な感じ”“落ち込んだ感じ”など10の幸福感測定項目に対してそう感じる頻度を5段階で（5：いつも感じる、1：全然感じな

い) 回答させた。

結 果

分析対象者のデモグラフィック特性

594人の全分析対象者のデモグラフィック特性の特徴は以下の通りであった。なお、以下の分析では、変数によって、回答の不備により分析対象者数が異なる。

平均年齢は43.0歳、配偶者のいる人585人、いない人9人、平均結婚年数18.6年、子どものいる人566人、いない人27人（1人は無回答）、子どもの数は平均2.3人、長子の平均年齢16.9歳、自分も含めた同居家族数平均4.5人、有職者455人、無職者139人、有職者の平均継続就業年数は11.2年、学歴は短大卒583人、大卒5人、専門学校卒3人、大学院卒1人、その他1人、収入は300万円以下23人、600万円以下128人、900万円以下216人、1200万円以下137人、1201万円以上80人であった。

本研究は、妻、母、就労者役割の達成度についての自己評価とSWBとの関連をみることが目的であった。そこで、以下では妻・母・就労者の3つの役割をもつ人、および妻・母の2役割をもつ人を分析対象とした。さらに就労者役割に関しては、常勤・正社員として働く人、パート・アルバイトなど非常勤で働く人の2種類の勤務形態の人のみを取り上げた。その結果、就労者役割が常勤、非常勤、無職のいずれかの就労形態であり、同時に妻役割、母役割を担う分析対象者は446人、内訳は、妻・母・就労者（常勤）役割を担う対象者（以下、常勤群と表記）は137人、妻・母・就労者（非常勤）役割の対象者（以下、非常勤群と表記）は174人、妻・母

表1 分析対象者のデモグラフィック特性

	常勤群	非常勤群	無職群
年齢	43.2(136)	43.0(174)	42.9(134)
結婚年数	19.0(130)	19.0(166)	18.0(129)
子どもの数	2.3(136)	2.2(173)	2.2(132)
長子の年齢	17.4(135)	17.3(173)	15.9(133)
家族数	4.7(137)	4.5(174)	4.6(134)
就業年数	17.0(132)	5.7(148)	----
学歴 短大卒	136	170	132
四大卒	0	3	2
専門学校卒	1	0	0
家庭の収入 1	3	9	1
2	15	48	31
3	43	74	47
4	42	34	31
5	33	7	20

注1：表中の数字は、年齢から就業年数については平均値、学歴、家庭の収入については各カテゴリの人数を表す。括弧内は、平均値の分析対象者数。

注2：家庭の収入 1 = 300万円以下、2 = 600万円以下、3 = 900万円以下、4 = 1200万円以下、5 = 1201万円以上。

役割の対象者（以下、無職群と表記）は134人となった。これら就労形態別のデモグラフィック特性は表1に示した。

各役割自己評価の高さ

まず、評価基準毎の各役割自己評価の高さを就労形態別に求めた（表2）。この自己評価の高さの違いをみるうえで、役割によって想定された過去基準が異なることから役割間の比較はせず、役割ごとに、評価基準の違いによる自己評価の高さの差を検討した。就労形態間の比較は本研究の目的にはないので、就労形態別に評価基準（他者基準・過去基準・理想基準）を独立変数とする1要因分散分析をおこなった。

その結果、全ての分析において評価基準の主効果が得られた（妻自己評価 常勤群 $F(2,264)=24.2$ 、非常勤群 $F(2,344)=34.4$ 、無職群 $F(2,260)=34.7$ ；母自己評価 常勤群 $F(2,270)=24.6$ 、非常勤群 $F(2,342)=39.7$ 、無職群 $F(2,262)=29.1$ ；就労者自己評価 常勤群 $F(2,264)=51.0$ 、非常勤群 $F(2,324)=36.4$ ； $ps<.01$ ）。ライアン法による多重比較の結果、妻役割においては常勤群、非常勤群、無職群のいずれにおいても、他者基準自己評価>過去基準自己評価>理想基準自己評価の順で妻自己評価が高いことが示された（ $ps<.05$ ）。また、母役割においては、常勤群、非常勤群で他者基準自己評価>過去基準自己評価>理想基準自己評価の順で母自己評価が高く、無職群では他者基準自己評価>過去基準自己評価および理想基準自己評価の順で高かった（ $ps<.05$ ）。就労者役割においては、常勤群では他者基準自己評価および過去基準自己評価>理想基準自己評価の順で、非常勤群では過去基準自己評価>他者基準自己評価および理想基準自己評価の順で就労者自己評価が高かった（ $ps<.05$ ）。

役割自己評価とSWBの関連

まず、充実感測定項目および幸福感測定項目に対する回答について、高得点が充実感、幸福感の高いことを示すよう変換した。全分析対象者における充実感と幸福感の平均は、それぞれ

表2 各自己評価の平均値

	他者基準	過去基準	理想基準	N
妻役割				
常勤群	3.3(0.9)	3.1(0.9)	2.9(0.9)	133
非常勤群	3.5(0.8)	3.2(0.8)	3.1(0.9)	173
無職群	3.7(0.8)	3.4(0.8)	3.2(0.9)	131
全	3.5(0.8)	3.3(0.8)	3.1(0.9)	
母役割				
常勤群	3.6(0.7)	3.4(0.7)	3.2(0.8)	136
非常勤群	3.7(0.7)	3.5(0.8)	3.4(0.8)	172
無職群	3.8(0.8)	3.6(0.8)	3.5(0.9)	132
全	3.8(0.7)	3.5(0.8)	3.4(0.9)	
就労者役割				
常勤群	3.8(0.9)	3.9(0.8)	3.2(1.0)	133
非常勤群	3.3(0.9)	3.9(0.7)	3.4(0.9)	163
無職群	—	—	—	
全	3.5(1.0)	3.9(0.8)	3.3(1.0)	

注：数値が高いほど自己評価が高いことを示す。

括弧内はSD、Nは各群の分析対象者数。

3.7 (SD=0.7, N=582), 3.3 (SD=0.6, N=580) であり, 両者の相関は, .70 ($p<.01$, $N=569$) と有意に高かった。本研究では, SWB の指標すなわち充実感と幸福感の違いの検討は目的ではない。充実感は各項目にあてはまる程度, 幸福感各項目について感じる頻度として測定されたが, いずれの指標においても, その得点は SWB の高さを示すものである。そこで, 両得点の平均値を算出して SWB 得点とし, 以下の分析をおこなった。なお SWB 得点は, 全分析対象者においては平均値が 3.5 (SD=0.6), 常勤群で 3.6 (SD=0.5), 非常勤群で 3.4 (SD=0.5), 無職群で 3.4 (SD=0.6) であった。

役割自己評価と SWB との関連を明らかにするため, 本来ならば, SWB を被説明変数, 各役割における各基準自己評価を説明変数とした重回帰分析を行うべきであると思われる。しかしながら, 各基準自己評価間の相関が高いため ($r=.54\sim.77$), 重回帰分析は実施できない。そこで, 役割ごとに, 各評価基準での自己評価高群・低群を設定し, 群間の SWB の違いを検討した。すなわち, 役割ごとに, 全分析対象者における他者基準自己評価, 過去基準自己評価, 理想基準自己評価の平均値を求め (表 2 参照), それによって各基準自己評価の高群・低群を設定した。そして, 就労形態ごとに, 各役割での各自己評価の高群・低群における SWB 得点について, t 検定をおこなった (表 3)。

その結果, 常勤群では, 妻役割において理想基準自己評価の高群・低群間に有意差がみられ ($t=3.3$, $p<.01$), 理想基準自己評価が高いほど SWB も高いことが示された。他者基準自己評価, 過去基準自己評価による有意差は得られなかった。母役割においては, 他者基準自己評価 ($t=3.7$, $p<.01$), 理想基準自己評価 ($t=3.2$, $p<.01$) による有意差がみられ, これらの自己評価が高いほど SWB は高かった。しかし過去基準自己評価による有意差はみられなかった。就労者役割においては, 他者基準自己評価 ($t=2.6$, $p<.05$), 理想基準自己評価 ($t=2.7$, $p<.01$) が高いほど SWB が有意に高いことが示された。

非常勤群では, 妻役割において, 他者基準自己評価 ($t=4.0$, $p<.01$), 過去基準自己評価 ($t=2.1$, $p<.05$), 理想基準自己評価 ($t=4.9$, $p<.01$) の高群の方が低群と比べ有意に SWB が高かった。母役割においても, どの基準の自己評価も SWB に対して有意な影響をもち, これらの自己評価が高いほど SWB は高いことが示された (他者基準自己評価 $t=5.1$, $p<.01$; 過去基準自己評価 $t=3.6$, $p<.01$; 理想基準自己評価 $t=4.8$, $p<.01$)。就労者役割においては, 他者基準自己評価高群・低群間での SWB の有意差が得られたが ($t=2.8$, $p<.01$), 過去基準

表 3 各基準自己評価高群・低群における平均 SWB 得点

役割		他者基準		過去基準		理想基準	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群
常勤群	妻	3.7(0.6)52	3.5(0.5)83	3.6(0.5)57	3.6(0.5)78	3.8(0.6)50	3.5(0.5)85**
	母	3.8(0.5)55	3.5(0.5)80**	3.7(0.6)44	3.5(0.5)66	3.8(0.5)53	3.5(0.5)82**
	就労者	3.7(0.6)76	3.4(0.5)47*	3.6(0.6)90	3.6(0.4)45	3.8(0.6)53	3.5(0.5)82**
非常勤群	妻	3.6(0.6)83	3.3(0.4)80**	3.5(0.6)76	3.3(0.4)87*	3.6(0.6)79	3.3(0.4)84**
	母	3.6(0.5)83	3.2(0.4)80**	3.6(0.5)66	3.3(0.4)76**	3.6(0.5)80	3.3(0.4)83**
	就労者	3.6(0.6)54	3.3(0.4)90**	3.4(0.5)111	3.5(0.4)52	3.5(0.6)83	3.4(0.4)80
無職群	妻	3.6(0.6)79	3.2(0.6)51**	3.6(0.6)71	3.3(0.6)59*	3.6(0.6)65	3.2(0.6)65**
	母	3.6(0.6)76	3.2(0.5)54**	3.7(0.6)47	3.2(0.6)57**	3.6(0.6)73	3.2(0.6)57**
	就労者						

括弧内は SD。N は各群の分析対象者数。

* $p<.05$ ** $p<.01$

自己評価、理想基準自己評価による有意な差はみられなかった。つまり非常勤群では、就労者役割において過去基準自己評価、理想基準自己評価はSWBと無関係で他者基準自己評価のみが影響を持ち、その他の役割では、いずれの基準の自己評価でも、高い方がSWBは高かった。

無職群では、全ての自己評価高群・低群間で有意差が得られ、各自己評価が高いほどSWBも高いことが明らかにされた(妻役割 他者基準自己評価 $t=3.7, p<.01$, 過去基準自己評価 $t=2.5, p<.05$, 理想基準自己評価 $t=4.2, p<.01$; 母役割 他者基準自己評価 $t=4.1, p<.01$, 過去基準自己評価 $t=4.2, p<.01$, 理想基準自己評価 $t=4.4, p<.01$)。

次に、いずれの基準の自己評価の高さがSWBと関連するのかを明らかにするため、役割ごとに、他者基準自己評価のみが高い人、過去基準自己評価のみが高い人、理想基準自己評価のみが高い人を抽出し、SWB得点の違いを検討した。例えば、他者基準自己評価は高いが過去基準自己評価や理想基準自己評価は低い人のSWBが、過去基準自己評価は高いが他の自己評価は低い人のSWBよりも高いのであれば、他者基準自己評価の高いことがSWBに繋がることが示されることが考えられる。具体的には、就労形態別に、役割ごとの他者基準自己評価、過去基準自己評価、理想基準自己評価の高・低群を組み合わせ、各基準自己評価がそれぞれ高群・低群・低群であった人(以下、他者基準群と表記)、低群・高群・低群であった人(以下、過去基準群と表記)、低群・低群・高群であった人(以下、理想基準群と表記)を抽出した。その結果、各人数が、常勤群では妻役割に関して12, 19, 5人、母役割に関して9, 7, 3人、就労者役割に関して8, 16, 2人、非常勤群では妻役割に関して14, 8, 2人、母役割に関して12, 6, 5人、就労者役割に関して3, 32, 8人、無職群では妻役割に関して14, 12, 3人、母役割に関して7, 1, 3人であり、役割によっては過去基準群、理想基準群が少数であった。そこで、過去基準群、理想基準群の両群を合成して時系列基準群とした。なぜなら、本研究でいうところの過去基準自己評価とは、現在の自己を過去の自己と比べることで得られた自己評価であり、一方理想基準自己評価は、目標としての理想自己と比較して得られた自己評価である。過去の自己、現在の自己、および、将来の達成すべき目標としての理想自己は同一の時間軸上にある自己として考えることができる。すなわち過去基準群も理想基準群も、時系列上の基準に照らして現在の自己を高く評価する群として考えることができるからである。そこで、他者基準群と時系列基準群におけるSWB得点の違いについて、 t 検定を就労形態別に役割ごとに実施した。

その結果(表4)、非常勤群の就労者役割においてのみ有意差が得られた。すなわち、非常勤群では、就労者役割において、他者基準群の方が時系列基準群よりもSWBが高いことが示された($t=3.5, p<.01$)。

考 察

本研究は、成人女性において、妻、母、就労者としての役割達成度に関する、他者、過去の自己、目標としての理想自己を基準とした自己評価とSWBとの関連を明らかにすることを目的とした。

まず、各役割に関する自己評価の高さ、およびSWBの高さについて述べると、いずれの就労形態においても、各自己評価の高さは若干の例外はあるが5段階評定の中点を越えており、概ね肯定的な自己評価をしているといえる。また分析から、妻役割、母役割に関しては他者基準

表 4 他者基準群と時系列基準群における平均 SWB 得点

	役割	他者基準群	N	時系列基準群	N
常勤	妻	3.5(0.4)	12	3.5(0.5)	24
	母	3.7(0.5)	9	3.4(0.4)	10
	就労者	3.7(0.4)	8	3.4(0.6)	18
非常勤	妻	3.5(0.4)	12	3.1(0.4)	9
	母	3.4(0.5)	12	3.2(0.3)	11
	就労者	4.1(0.4)	3	3.3(0.4)	36**
無職	妻	3.4(0.5)	13	3.3(0.4)	15
	母	3.3(0.6)	7	3.4(0.1)	3

括弧内は SD。N は分析対象者数。** $p < .01$

自己評価が最も高く、一方、就労者役割に関しては過去基準自己評価が最も高かった。つまり妻として、母としては、成長したと感じることや理想と比べてよくやっていると感じることはあまりないが、他者との比較では高く自己評価しており、これに対して就労者としては、他者あるいは理想と比べてよくやっているとはあまり思わないが、成長感は感じているということである。これには、過去基準自己評価における過去の設定の違いが影響していると考えられる。すなわち、本研究では妻、母役割に関しては少し以前、就労者役割に関しては仕事を始めた頃と比べて回答することを求めたため、妻、母役割に関しては経過時間が短く、就労者役割ほどには自己の成長を感じにくかったものと思われる。また、いずれの役割においても理想基準自己評価は他の2基準の自己評価よりも低いものであった。SWBの高さについては、平均値が充実感、幸福感、SWB得点とも5段階評定の中点を越えており、本分析対象者のSWBは肯定的な状態であったと思われる。

次に、各役割自己評価とSWBの関連について考察を加える。

表3より、常勤群では、妻役割において理想基準自己評価がSWBと関連があり、理想基準自己評価が高いほどSWBも高いことが示された。母役割および就労者役割においては、他者基準自己評価と理想基準自己評価がSWBと関連した。過去基準自己評価の高さは、常勤群においてはSWBと関連しないことが示された。

非常勤群では、妻役割および母役割において、他者、過去、理想のすべての基準による自己評価がSWBと関連していた。就労者役割においては他者基準自己評価のみがSWBと関連を示し、就労者として他者基準自己評価が高いほどSWBは高くなることが示唆された。

無職群では、妻役割および母役割において、すべての基準自己評価がSWBと関連することが示された。すなわち、いずれの役割においても、他者、過去の自己、理想自己を基準とした自己評価の高いほどSWBも高くなることが示された。

これらの結果より、他者基準自己評価は、常勤群では、母役割および就労者役割においてはSWBと関連するが、妻役割においては関連しないことが明らかとなった。常勤で働く女性において、母としてあるいは就労者として他者よりも高く自己評価することは高いSWBと関連するが、妻として他者と比較した自己評価の高さはSWBとは無関係であることが示された。一方、非常勤群、無職群では、どの役割においても他者基準自己評価はSWBと関連があり、他者と比べての自己評価が高いほどSWBも高いことが示された。

これに対して過去基準自己評価は、常勤群の全ての役割と非常勤群の就労者役割において、

SWB とは無関連であった。しかし非常勤群および無職群での妻、母役割においては過去基準自己評価は SWB と関連がみられた。非常勤群、無職群などのおそらく家庭外より家庭内にウェイトがあると思われる女性にとっては、妻として、母として過去よりよくやっていると考えることは高い SWB と関連をもつが、就労者として自分が成長したかどうかは SWB と関連がない。一方、常勤の女性にとって、妻、母、就労者として自分が成長したかどうかという評価は、たとえそれが高くてもそれで SWB が高まるというわけではないことが示唆された。

理想基準自己評価は、常勤群、無職群で、全ての役割において SWB と関連が見出された。しかし非常勤群では、就労者役割においては SWB と無関連であった。つまり同じく就労者役割を担っても、常勤群では就労者として理想と比べて自分がよくやっていると考えることは高い SWB と関連するが、非常勤の女性の場合、SWB とは繋がらない。一方、妻、母役割においては、常勤、非常勤、無職群とも理想と比べて高く自己評価できることは高い SWB と関連することが明らかにされた。

また、表 4 より、非常勤群の就労者役割に関して、他者基準自己評価が高く他の基準での自己評価の低い人の方が、時系列基準自己評価が高く他の基準での自己評価の低い人よりも SWB の高いことが示された。分析対象者数が少ないものの、非常勤群にとって就労者役割に関しては、他者基準自己評価の高いことが高い SWB と関連する傾向が示唆されたといえよう。

以上の結果から、就労形態や役割についておしなべてみると、成人女性の場合、他者基準自己評価と理想基準自己評価が SWB と関連するといえよう。同世代の他の女性と比べたら自分はよくやっていると考えることや理想と比べてよくやっている方だと思えることが、高い充実感や幸福感とつながるようである。Suls & Mullen (1982) は、8 歳ごろから青年期にかけては類似他者との社会的比較を多くおこなうが、それ以降の成人は、非類似他者との社会的比較を、さらには時系列比較をおこなうとしている。それによると、40 歳から 65 歳ぐらいの成人は、自分の存在価値を感じるために自分自身の独自性 (uniqueness) を信じたいのであり、そのために自分とかけ離れた非類似他者との比較がなされるようになって考えられている。また、高田 (1993) は、30~50 歳代の成人男女の他者比較の頻度に関して、青年ほどには多くないことを明らかにしている。無論、これらの研究においても、年齢段階によって、類似他者との比較や時系列比較などの比較行動のいずれかが全くおこなわれない、と考えられてきたわけではないが、本結果から、成人女性にとっての類似他者との社会的比較の重要さが示された。つまり、成人女性にとって身近な類似他者は、少なくとも自己評価の重要な基準のひとつであり、SWB に影響を与えるものであることが明らかにされた。また、Ruble & Frey (1991) によれば、スキルや知識の獲得過程においては、社会的比較も含む自己評価情報の使用に 4 段階があり、自己の能力のキャパシティと限界の推測の段階で、自己査定行動や類似他者との社会的比較がなされる。これらから、本研究の調査対象となった 40 歳代の成人女性は、自己の独自性を求めるというよりも、自己の能力査定の必要を感じているといえるかもしれない。表 4 において、非常勤群での就労者としての高い他者基準自己評価が SWB と関連した結果も考え合わせると、彼女たちにとって特に就労者としての自己の能力の高さは未だ曖昧であることが示唆されているといえよう。岡本 (1999) によれば、中年期は様々な身体的、心理的、社会的変化が顕現化することによって、それまでの自己の生き方や自己の在り方が問われ、青年期に獲得したアイデンティティの再体制化が図られる年代である。40 歳代前半の彼女たちは、自己がどのような存在であるのかを類似他者との比較によって明らかにしようとしているものと思われる。しか

しながら、他者との比較によって得られる自己評価は、常に他者を意識しなければならず、また評価結果を他者に依存するものであるため不安定なものと考えられる。成人女性が、自己の内にある基準ではなく他者を意識し、他者のあり方を気にしながら生活していることが推測される。

また、こうでありたいと思う理想自己と比較して得られた高い自己評価が、高いSWBと関連したことは、現在の自分がよりよいものに近づきつつあり、また今後もよりよいものへ変わり得るものとして自己を捉えることが、SWBを高めたことを意味すると考えられる。この結果は、堀毛（1995, 1996）の結果と一致するものである。また、人は将来においてより望ましい自分自身になるために、現在において自己に関する否定的情報の受容も厭わない自己査定(self-assessment)を行うという知見があり（越, 1996）、時間軸上の未来の時点から現在の自己を捉える視点が、現在の積極的な行動を支えることが示唆されている。つまり、時間軸上に自己を置き、現在から未来の理想的な自己への肯定的変化の可能性を認知し、よりよいものへ変わり得るものとして自己を把握することがSWBを高めると考えられる。理想や目標をもち、それを目指し、ある程度の達成を自己評価できることが、成人のSWBにとって重要であることが本研究でも確認されたといえる。

就労形態による違いは、過去基準自己評価に関してみられた。過去基準自己評価は、非常勤群の妻・母役割、無職群の全ての役割においてSWBに影響したのに対し、常勤群ではいずれの役割においてもSWBに影響はみられず、非常勤群でも就労者役割において影響はみられなかった。つまり、他の女性は他者基準、理想基準だけでなく過去基準自己評価もSWBに関連するのに、常勤女性において、過去基準自己評価の高さはSWBに影響しないのである。これは、常勤で働く女性にとって、過去の自分より成長したという実感がたとえあったとしても、それはSWBとは結びつかないことを示す。つまり自己把握の視点は過去にはなく、自分の外および将来の望ましい在り方に重要な基準があるのではないだろうか。一方無職群の場合、妻役割、母役割において、過去は自己評価の基準として機能し、他者や理想と同様にSWBに対して影響をもっていた。無職群において、自己評価の重要な基準が過去にもあるといえ、“自分なりの”とか“自分にとっての”といった、自己内での成長感が重要なのだといえよう。また、非常勤群にとっては、妻役割や母役割のような家庭内での役割に関しては、成長感SWBにとって意味をなすが、就労者役割においては重要でなくSWBに対して影響しなかったと考えられる。

つまり、時系列上での自己評価がSWBに及ぼす影響を考えると、過去を基準として現在を見ることは全ての人にとって必ずしもその影響力は大きくなく、未来の視点から現在を見ることが重要といえるかもしれない。本研究では、表4の分析において、時系列基準自己評価がSWBを高めることは明らかにされなかった。これは、過去基準群と理想基準群を合成して検討したため、過去基準自己評価の影響と理想基準自己評価の影響が相殺された可能性があり、過去を基準とした自己評価、未来の理想を基準とした自己評価のSWBへの影響の検討は十分とはいえない。時系列による自己評価における、過去と未来の機能の更なる検討が今後の課題といえるだろう。

以上から、成人女性の自己評価とSWBの関連性が示された。仕事をもち、家庭をもち、子どもを育てるという課題に取り組んでいる、まさにその只中の40歳代女性がどのような基準による自己評価をし、それが充実感や幸福感を感じながら適応的に生きることによってどのように影響するか、その一端が示されたといえよう。こうした妻・母・就労者としての成人女性のSWBは、

夫や子どもにも多大な影響を及ぼすことが推測される。SWBの規定要因の更なる検討とともに、女性の各役割達成とSWBが、夫や子どもに与える影響について検討される必要があるだろう。

引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, 84, 485-503.
- Barnett, R. C. 1994 Home-to-work spillover revisited: A study of full-time employed women in dual-earner couples. *Journal of Marriage and the Family*, 56, 647-656.
- Barnett, R. C., & Baruch, G. K. 1985 Women's involvement in multiple roles, role strain, and psychological distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 135-145.
- Barnett, R. C., & Marshall, N. L. 1992 Worker and mother roles, spillover effects, and psychological distress. *Women and Health*, 18, 9-40.
- Baruch, G. K., & Barnett, R. C. 1986 Role quality, multiple role involvement, and psychological well-being in midlife women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 578-585.
- Carlson, R. 1965 Stability and change in the adolescent's self-image. *Child Development*, 36, 659-666.
- Carr, D. 1997 The fulfillment of career dreams at midlife: Does it matter for women's mental health? *Journal of Health and Social Behavior*, 38, 331-344.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中国夫 1990 多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果— 社会心理学研究, 5, 137-145.
- Festinger, L. A. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 堀毛一也 1995 主観的充実感の規定因としての社会的スキルと目標特質 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 312-315.
- 堀毛一也 1996 主観的充実感の規定因としての目標内容・比重の相違 日本心理学会第60回大会発表論文集, 123.
- 兵頭恵子・大利一雄 2000 成人女性における多重な役割従事に関する研究—身体症状および充実感に対する影響— 神戸女学院大学学生相談室紀要, 6, 43-49.
- 越良子 1996 能力の自己査定行動と自己高揚期待 心理学研究, 67, 42-49.
- Martire, L. M., Stephens, M. A. P., & Atienza, A. A. 1997 The interplay of work and caregiving: Relationships between role satisfaction, role involvement, and caregivers' well-being. *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 52B, S279-S289.
- Mettee, D. R., & Smith, G. 1977 Social comparison and interpersonal attraction; The case for dissimilarity. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes*. Washington; Hemisphere. Pp.69-101.
- 岡本祐子 1999 アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリア形成 組織科学, 33, 4-13.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代青年の心情モデルについての検討—

- 教育心理学研究, 32, 100-109.
- Ruble, D. N., & Frey, K. S. 1991 Changing patterns of comparative behavior as skills are acquired : A functional model of self-evaluation. In J. Suls & T.A.Wills(Eds.), *Social comparison*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.79-113.
- Siebert, S. D. 1974 Toward a theory of role accumulation. *American Sociological Review*, 39, 567-578.
- 鳴信宏 1997 現代大学生の幸福感と幸福度 中京大学社会学部紀要, 12, 1-17.
- Stassen, M. A., & Staats, S. R. 1988 Hope and happiness: A comparison of some discrepancies. *Social Indicators Research*, 20, 45-58.
- Stephens, M. A. P., Franks, M. M., & Townsend, A. 1994 Stress and rewards in women's multiple roles: The case of women in the middle. *Psychology and Aging*, 9, 45-52.
- Suls, J., & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave : Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspective on the self*. Vol.1. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.97-125.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較－日本人大学生にみられる特徴－ 教育心理学研究, 41, 339-348.
- Thoits, P. A. 1983 Multiple identities and psychological well-being: A reformulation and test of the social isolation hypothesis. *American Sociological Review*, 48, 174-187.
- 植田智・吉森護・有倉巳幸 1992 ハッピネスに関する心理学的研究(2)－ハッピネス尺度作成の試み－ 広島大学教育学部紀要第1部 (心理学), 41, 35-40.
- Vandewater, E. A., Ostrove, J. M., & Stewart, A. J. 1977 Predicting women's well-being in midlife: The importance of personality development and social role involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1147-1160.

The moderating effects of evaluative standards on the relationships between self-evaluation of role performance and subjective well-being.

Ryoko KOSHI*, Keiko AKIMITSU**
Noriko YOSHIMURA**, Yasuko MORINAGA***

Abstract

The purpose of this study is to investigate the moderating effects of evaluative standards on the relationships between self-evaluation of role performance and subjective well-being among adult women. Japanese married women with children were requested to assess how well they performed their social roles as wives, mothers, and workers, by using three different evaluative standards: similar others, their past selves, and their ideal selves. The results showed that those who rated themselves high when measured against similar others or their ideal selves reported a strong sense of fulfillment, regardless of their occupational status. It was also revealed that among full-time workers, their self-evaluation in relation to their past selves were not significantly related to their subjective well-being. Importance of social comparison among women in their forties was discussed; they assess themselves by referring to other women, and striving for their ideal selves might have positive effects on their subjective well-being.

Key Words: subjective well-being, social roles, self-evaluation,
standards of evaluation, adult women.

* Division of School Psychology and Counseling

** Konan Women's University, Department of Psychology

*** Kobe College, Department of Human Sciences